

武豊の瞬間

稀代の天才騎手10年の歩み



島田明宏

「武豊」の瞬間

稀代の天才騎手10年の歩み

島田明宏

江苏工业学院图书馆
藏书章

「^{たけゆたか}武^{しゅんかん}豊」の瞬間 ^{きんたい}稀代の^{てんさい}天才^{きしゅ}騎手^{ねん}10年の^{あゆ}歩み

1997年 4 月28日 第 1 刷発行

1997年 6 月11日 第 3 刷発行

著 者◆^{しまだ あきひろ}島田明宏

発行者◆小島民雄

発行所◆株式会社集英社

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

☎03-3230-6090 [編集部] 03-3230-6393 [販売部] 03-3230-6080 [制作部]

印刷所◆廣済堂印刷株式会社

製本所◆文勇堂製本工業株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価はカバーに表示してあります。

©1997 AKIHIRO SHIMADA, Printed in Japan

ISBN4-08-783109-4 C0075

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

序

「あれ……。しょうもないこと言ってもいいですか？」

東京・銀座の中華料理店で、キャッシュヤーの前に立った彼はジャケットやズボンのポケットというポケットを慌ただしく探り、ふうっとため息をついた。

「また、やってしまった。財布がないですよ。どこで落としたのかなあ」

彼の口から「やってしまった」という言葉を聞かされるのには慣れっこになってしまった。財布に限らず、携帯電話、手帳、サングラス、帽子、腕時計……と、身につける物はおそらくひと通り紛失している。財布が無事でもクレジットカード1枚だけを器用になくしたりするのだから、言葉がない。銀座4丁目の交番で遺失物届けにペンを走らせながら、

「あああ、せっかく頑張ってニンジンを食べたのになあ。無理するからこういうことになるんですよ」

と、嫌いなニンジンのせいにし、人懐っこい笑顔を見せる。

彼が、遺失物届けの職業の欄に『騎手』と書いた頃には、ひとりしかいなかったはずの婦人警官が4、5人に増え、この珍客の周囲を取り囲んでいた――。

『天才』『貴公子』と呼ばれるスーパースターも、馬から降りて鞭むちを置くと、愛嬌あいぎやうたっぷりのとぼけた青年になる。

武豊。87年にデビューし、新人最多勝記録となる69勝を挙げ、96年シーズン終了時で通算1221勝をマークした、稀代きだいの名騎手である。89年から92年まで4年連続で春の天皇賞を勝つなど国内のGIを21勝。さらに94年には、日本人騎手として初めてフランスのGIを勝つなど、その名は世界に轟とどろく。

JRA（日本中央競馬会）の年間売り上げは、今や4兆円に届く勢いだ。その『4兆円のプレッシャー』を背負いながらも、憎たらしいほど動じず、淡々と勝ち続ける。マシンのように緻密ちみつな手綱たづなさばきを見せる一方で、「また、やってしもうた」と頭を掻く彼は、極めて魅力的な『変なヤツ』だ。

92年7月――。

「ねえ、明日から一緒にアメリカに行きませんか？」

月曜日の朝だった。寝ぼけながら受話器を取った私は、最初のうち誰からの電話なのかわからずにいたのだが、このひと言で声の主が豊であることを理解した。他にこんな突拍子もないことを言い出す者はいない。

前日、彼は中京競馬場の4歳未勝利戦で斜行のため失格、騎乗停止処分になっていた。

「アーリントンで調教に乗って、レースを観て気分を変えたいんですよ」

どうやら本気らしい。さすがに翌日の出発は無理だったが、私は彼の渡米に付き合わせてもらうことにした。

毎年豊に騎乗馬を与えるノエル・ヒッキー調教師ら、シカゴのアーリントン国際競馬場の関係者に電話をし、航空券やホテルの手配をしながら、私は、豊が以前、次のように話していたことを思い出していた。

『お前、毎年アメリカくんだりまで遠征するなんて大変やな』とよく言われるんですが、僕にしてみれば、『今年の夏は札幌で乗ろうか、それともアメリカにしようか』という程度感覚なんです」

金銭的な余裕があるから「明日からアメリカ」と言えるわけではない。この男にとっては、海を渡るのであれば、それが津軽海峡であろうと太平洋であろうと同じことなのだ。武豊の発想は、国境などという枠組みに縛られることがない。

何につけても、彼には『枠』がない。発想にも、夢にも、また、自身が理想とする武豊像にも枠がない。

彼を『××な男』という既存の枠に当てはめて説明することは不可能である。

だから人は、彼を、ただの天才として片づけようとする。

「犀眼、鋭意、時に厳酷でもあり、烈しくもあり、鋭くもあり、抜け目もない英雄であるが、どこか一方に、開け放しなどところがある。東西南北四門のうち一門だけには、人間的な愚も見せ、痴も示し、時にはぼんやりも露呈している。彼をめぐる諸侯は、その一方の門から近づいて彼に親しみ彼に甘え彼と結ぶのであった」

吉川英治は『三国志』（第8巻・講談社文庫）のなかで、豊臣秀吉についてこのように記している。やることなすこと厳密にすぎたゆえに孤立した感のある諸葛孔明に比較しての記述である。

豊にも、開けっぱなしの門がある。ひよっとしたら、その開き方は秀吉よりもずっと大きいかもしれない。

どこまで可能かわからないが、本書のなかで皆さんと一緒に、その門から武豊のなかに入り込んでみようと思う。また、豊が頑として開けようとしないうちも叩いてみたい。

きっと、そこに、貴方の知らない武豊がいる。

「武豊」の瞬間

稀代の天才騎手10年の歩み

目次

序

第1章	しなやかなカリスマ	<i>with Super Creek</i>	9
第2章	長身のアドバンテージ	<i>with Inari One</i>	25
第3章	孤高の戦術	<i>with Shadai Kagura, Vega, Oguri Roman</i>	43
第4章	ひらかれた道	<i>with Bamboo Memory</i>	67
第5章	奇跡の舞台裏	<i>with Oguri Cap</i>	83

第6章	重圧、そして挫折	<i>with Mejiro McQueen</i>	95
第7章	好敵手、武豊になれなかった男	<i>with Narita Taishin</i>	123
第8章	洒落者のプライド	<i>with Heart Lake, Yamanin Paradise</i>	161
第9章	何よりも、運	<i>with Air Groove</i>	177
第10章	見はてぬ夢	<i>with Dance In The Dark</i>	187
第11章	温かさをくれた人々	<i>with Dance Partner</i>	209
第12章	世界のレギュラー	<i>with El Senor, Ski Paradise</i>	229
	あとがき		263

写真

★

今井寿恵

長濱永於人

装幀

★

木村典子

「武豊」の瞬間

稀代の天才騎手10年の歩み

第1章

しなやかなカリスマ

with
Super Creek

砂の表面に浮いた水分が日の光を鈍く反射し、ダートコースは黒いサテンのような光沢を帯びる。その外側を、張り替えられたばかりの緑鮮やかな芝コースがぐるりと囲む。

午前5時。コースの開門と同時に1頭、また1頭とサラブレッドが馬場に入り、乗り運動を始める。ブルツという馬の鼻息と人間たちの話し声、そしてリズムミカルな蹄の音がスタンドに響き、競馬場全体が魚河岸のように活気づく。

真夏の小倉競馬場の、蒸し暑い1日の始まりである。

96年6月に通算重賞勝ち数を100とした名手・河内洋、また、同年GⅠを4勝し『元祖天才』の存在を強烈にアピールした田原成貴、ライブリマウントとのコンビでダート戦線を賑わせた石橋守、さらにはスーパールキーとして一躍人気者になった福永祐一ら、全国区の顔を持つ騎手たちが攻め馬をこなす様が窺える。週末のレースでは敵同士として鎬を削る彼らも、平日の調教時には和気あいあいと話す。

「俺の記録なんてすぐに破られるよ」

ある夜、小倉の繁華街で河内がそう漏らした。

「いくら俺が超特急で最短、最速の記録を作っても、後ろから『のぞみ』みたいなヤツが追いかけてきてるんだからさ」

その「のぞみ」みたいなヤツ、武豊も、夏の小倉のレギュラーメンバーである。

95年、7月――。

「アカン、またフグやわア」

豊は、小倉港の防波堤に腰を下ろし、釣り糸をたれていた。

前週の競馬が終わった時点で、彼は通算の勝ち鞍を999としていた。日曜日に4勝し、1000勝の大会に王手をかけたのである。

「そりゃあ、周りが『あとひとつ』と騒ぐから気にはなってますよ」

そう言いながら、彼は釣り上げたクサフグを針から外した。

「けど、どうも自分のことのような気がしないんです。新聞にこれまでの1000勝騎手の一覧表が載ってるじゃないですか。僕が子供の頃から見てきた大騎手ばかりなんですよね。自分がその人たちと肩を並べるなんて、ピンと来ないんですわ」

そんな話をしている時、帽子が飛ばされないよう頭に片手をあてた、ひとりの華奢な女性が駆け寄ってきた。

ひと月前に結ばれたばかりの妻、量子だった。

「うわあ、可愛い」

と、彼女は豊の釣ったクサフグを指でつついて膨らませる。クサフグは充血した目を吊り上げ、またさらにプウッと膨らんだ。

「おっとっと……」

港を出る大型船がこしらえた波が足元に寄せ、豊の握っていた竿に糸ふけができた。豊は、ずっと

竿を引きながらリールを回し、糸をほどよい張りに戻した。

「あんまり足踏みはしたくないですね。1レースでも早く済ませたい。でも、有力な騎乗馬が揃っているのは日曜日だから、土曜日は無理かもしれないなあ」

そこにいたのは確かに、数日後に大記録に挑む張本人だった。が、私はまるでその男の友人と話しているかのような気分になった。かと思えば、次の瞬間には紛れもない武豊になり、そしてまたすぐに呑気な若者に戻る。

「まあ、減ってく数字じゃないんで、気楽なものですよ」

つくづく不思議な男だと思う。

「ハ〜イ、いい子ですねえ」

いつのまにか遠くに座りなおしていた量子は、まだクサフグと遊んでいた。長閑な平日の昼下がりであった。

その週末、7月23日、豊は2回小倉競馬4日目の第3レースをエールノコイビトで勝ち、デビューから8年4か月という史上最短記録で通算1000勝を達成した。この時、豊は26歳4か月。兄弟子の河内洋が持っていた、1000勝達成時33歳3か月という最年少記録を大幅に更新した。

豊は、常に競馬界の主役であり続けてきた。

加賀武見（現調教師）が6年に記録した58勝の新人最多勝記録をあっさり更新し、2年目の秋、史上最年少でクラシックレースを制し、関西リーディングの座についた。87年のデビューから96年まで、全国リーディングとなること7回。デビューした87年と翌88年、そして91年以外の年は、すべて彼が頂点に立っているのである。

騎手は、ただ速く走るために作られたサラブレッドに跨^{また}がり、時速70キロのトップスピードで腕を競う。爪^{つま}先と、手綱^{てなづな}を握る両手で間接的に馬に触れるだけの不安定な姿勢で馬を御す。手綱がハンドルにもブレーキにもなるが、クルマのようにハンドルを右に切れば右に曲がるわけではなく、ブレーキを踏んだからといって止まるとは限らない。騎手は、厄介^{やっかい}な乗り物を操作するレーサーであり、アスリートなのである。

とはいえ、瞬発力、持久力などの絶対的運動能力が問われるわけではない。「馬7人3」の割合で勝敗を左右すると言われているが、つまるところ走るのは馬である。騎手が、例えば自身の握力を5キロ強くしたからといって、それがそのまま成績アップにつながるはずはない。確かに、騎乗技術と経験に裏打ちされた判断力がモノを言うのだが、ある意味では努力のしようのない職業とも言える。

この極めて他力本願な性質のスポーツで頂点の座を維持しているのだから、豊には不可解な能力があると言わざるをえない。

「馬の上でのバランス、遠心力に振られないコーナーワーク、前に行きたがる馬の力を巧みに抜く^ひ肘^{ひじ}のたたみ方など、すべての技術が超一流です。ですから、あれだけ勝つのも、別に不思議なことじゃないですよ」

と、騎手時代に日本人として海外初勝利を挙げ、最強馬シンボリルドルフの管理者としても知られる野平祐二調教師は言う。

豊自身に「自分の最も優れたところは？」と問うと、ウーンと唸^{うな}ってから悪戯^{いたづら}っぽい笑みを浮かべ、こう答えた。

「運のいいところですかね」

やはり、不可解だ。

奇しくも、英米仏日では『天才』と呼ばれる同世代の若武者がなみいるベテランに伍し、リーディング争いを繰り広げている。

世界一の馬主であり、UAE（アラブ首長国連邦）のドバイ国防大臣であるシェイク・モハメドの主戦として知られるイギリスのランフランコ・デットーリ。デビュー2年目、17歳にして450勝の全米トップの勝ち星をマークし、89年には598勝を挙げ、年間最多勝記録を更新したアメリカのケント・デザーモ。ヨーロッパのナンバーワン・トレイナー、アンドレ・ファールブルの主戦であるフランスのティエリー・ジャルネ。

そして日本の武豊、である。

いい騎乗馬で実績を残し、また優れた騎乗馬を得る……というサイクルを回す達人という点で前記の4人は共通している。が、海外遠征に出るたびに旅行会社が応援ツアーを組み、結婚式の記事がスポーツ新聞の一面を飾るようなスターは豊しかない。400万以上の発行部数を誇る少年漫画誌で「スポーツ界のヒーロー」というアンケート調査を行ったところ、豊はロサンゼルス・ドジャースの野茂英雄、オリックス・ブルーウェーブのイチローに続く第3位に支持されたという。帽子とサンダラスなしで外を歩くと女の子たちに囲まれてしまう騎手など、他のどの国を探してもいない。彼は、世界の騎手のなかでも特異な存在なのである。

豊の特殊性は、このスター性、カリスマにある。

彼のカリスマはどこから来るのだろうか。

野平祐二の次の言葉が、その答えを探すヒントになる。

「18頭の馬がひとかたまりになっていても、すぐに武君を見つけることができるでしょう。彼の背が